

## 1 背景と目的

ジネンジョはヤマノイモ科の作物で、とろろ汁や山かけとして生食されており、本県では中山間地域を中心に栽培されています。ジネンジョの施肥は、種芋定植時の基肥と生育後半の追肥が行われてきましたが、生産者から追肥が不要で省力的かつ安価な全量基肥肥料の開発が要望されていました。山間農業研究所では、平坦地から中山間地域に適応する低コストなジネンジョ用全量基肥肥料の開発に愛知県経済農業協同組合連合会と共同して取り組みました。



ジネンジョ  
(芋：左、とろろ：右)

## 2 研究内容

ジネンジョの養分吸収特性が不明でしたが、試作肥料を開発するにあたり、植物体や土壌中に含まれる窒素(N)、リン(P)、加里

表1 試験区の構成

年度	ほ場	標高 (m)	合計施肥量(N-P-K) (g/株)		慣行区 の追肥
			試作肥料区	慣行区	
2020	研究所内	505	6.8-1.6-9.3	6.8-5.3-6.3	なし
2021	研究所内	505	6.8-1.6-9.3	6.8-5.3-6.3	なし
2022	研究所内	505	6.8-1.6-9.3	6.8-5.3-6.3	なし
2022	現地・平坦地	50	6.8-1.6-9.3	9.5-3.0-3.0	あり
2022	現地・中山間地	510	6.8-1.6-9.3	18.0-5.8-7.9	なし

(K)の量を経時的に調査することで解明し、2020年度にジネンジョの養分吸収特性に応じた全量基肥肥料を試作しました。2020年から2022年まで試作肥料のジネンジョへの適合性を確認するため、研究所内で試作肥料区、慣行肥料を用いた慣行区を設置し、新生芋長、新生芋重を調査しました。また、2022年度には標高の異なる地域の農家のほ場で、試作肥料の現地適応性を確認しました(表1)。

## 3 試験結果

試作肥料区の新生芋長、新生芋重は慣行区と同等で(表2)、試作肥料がジネンジョ栽培に適することが確認できました。

現地適応性試験では、平坦地及び中山間地ともに試作肥料は慣行肥料の生育・収量と同等の評価となり、

表2 新生芋重と新生芋長(山間農業研究所 2020~2022年度)

年度	標高 (m)	収穫日	新生芋重(g/本)		新生芋長(cm/本)	
			試作肥料区	慣行区	試作肥料区	慣行区
2020	505	11/26	521.4	511.2	131.6	130.6
2021	505	11/16	456.4	428.0	130.7	130.3
2022	505	12/5	403.1	385.9	109.4	112.9

試作肥料の平坦地から中山間地への適応性が確認できました。

開発した肥料は、2023年1月に商品名「自然薯ワンタッチ」として販売を開始しました。産地で使用が多い被覆燐硝安加里よりも価格が3割程度安くなり、現在、県内面積の5割に普及しています。